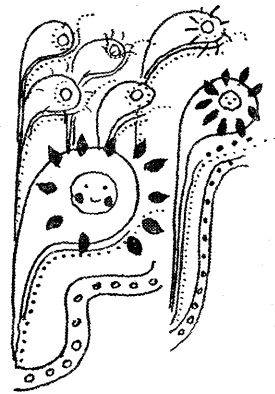


自然とのふれあい (その2)

——草餅つき——

斉藤 芳子



私どもの幼稚園は、幸に、自然に恵まれていた。そこで、積極的に、自然とふれ合う保育を考えてきた。以下に、その例をいくつかあげてみよう。

入園当初は、新しいお友達と早く楽しい幼稚園生活が自発的に出来るように、戸外で遊ばせることを主眼とした。寒い冬ごもりの冬が終って、草木も芽ぐみ、人の心も浮きたつ春である。

四季のはっきりしている日本では、その変化をてがかりに、自然を教材として、いろいろな事に気づかせ、観

察眼を養い、情操を育てることが可能である。

子どもたちも、四月、五月は花壇の水仙やチューリップに皆で小さなじょうろで水をやりながら、

さいた、さいた、チューリップの花が

並んだ、並んだ、赤、白、黄色

どの花見てもきれいだな。と、大きな声で歌っている。勿論、花も赤、白、黄色と植えておく。音楽の教材にもなるから……

園庭の隅の草はらや、野外を散歩すると、黄色いタンポポやナズナ、ヒメオドリコ草、オオイヌフグリなどの

小さな白や紫の花などが子どもらを迎えてくれる。

テラスに小さなジャムの空瓶やヨーグルトの空瓶に草花の名のラベルを貼って、机の上に並べ、皆で分類してミニ生花展が開催される。それを観察コーナーとして常設すると、何時も季節の花や実が置かれるようになる。

野の花の名前に興味が出来たころ、ヨモギもいっしょに摘んで名前を教える。花のない草にも名前のあることを知って、草に対しても関心がめばえてくる。

そこで、幼稚園では、毎年五月五日の「こどもの日」の祝日を、「端午の節句」の日でもあるから、お父さまの保育参観日としてお招きすることになっている。

ねらいは集団生活の中の幼児を自己評価して理解していただくこと。又、父と子がふれあい、遊ぶ日として、ゆっくり話合いやボール投げをしてすごしてもらう。

園庭に高く鯉のぼりをあげて、

屋根より高い鯉のぼり

大きいま鯉はお父さま 小さいひ鯉は子どもたち

おもしろそうに泳いでる

と、子どもと一緒に青空を見上げて、声いっぱいにうたひ、その後で四月中に園児達と摘んだ「ヨモギ」で草餅をついていただく。

次に抜粋するのは、草餅つきへのプロセスをつづった保育日誌である。

・四月一四日

「ヨモギ」の草を正しく観察するために、皆でシャベルで根から掘り起す。根が深くて力いっぱいかけ声をかけながらやっと掘った。

「わあ、ずいぶん長い根だ」

「ごぼうみたい」との声が聞こえる。

深い空瓶に根つきのまま差して水を入れ、机の側に並べている。ついでに先日の瓶の水の取替えもする。

・四月一六日

今日もしゃがんで、草つみをしている子がいる。「よもぎと似た草」を摘んで、「ヨモギ」と比較して見せた。

T 「白っぽい葉の方がヨモギだよ」

C 「葉の裏が白いね」

O 「葉のギザギザも少し違うよ」などの対話があった。

また「ヨモギ」に匂いのあることを知り、「いい香りがするよ」と皆の鼻先へ持ってくる子もいた。

・家庭へのおたより(同日)

若草の「ヨモギ」が芽をだしました。今年も親子で園の遊びに「ヨモギ摘み」をして、五月五日のこどもの日「端午の節句」の草餅つきをしたいと思います。

ヨモギに似た草もありますので、お母さんも勉強して下さい。子どもに教えてあげて下さい。

(参考)

・ヨモギは菊科の多年性の植物。長さ七〇センチ位に伸びる。葉は互生し、菊の葉のように深く裂けている。早春に新しい葉を摘んで「草餅」に入れるので「モチクサ」ともいわれる。葉草で、おきゅうのもぐさは、葉裏の綿毛をとったものである。汁の実、よもぎ飯、よもぎ茶にもする。

・四月一八日―家族でヨモギ摘み―

前もって話してあったので、登園した親子からすぐ摘み草の作業に入る。

○お母さんに負けないでビニール袋や自分の帽子に摘んだヨモギを入れる子

○「こんなにとったよ」と嬉しげに教師の所に見せに来る子

○お母さんと摘んだヨモギを、ダンボール箱に集めて入れる子

お母さんの来ない子は、グループをつくって先生に教えられながら摘んでいた。四〇分位でダンボール四個位に集った。園庭にゴザを敷いてお母さん方で仕事を分担して「ヨモギ」処理をする。

○混じった雑草や固い茎を取り除く人

○ヨモギをきれいに洗う人

○大きな鍋にお湯を煮たててゆでる人

○ゆであがったヨモギをまな板に並べて、トントンと包

丁で小さく刻む人

○刻んだヨモギをおにぎりにして、水を切りサラシラッ
プにつつま人

あつという間に五〇個程のヨモギのおにぎりが出来
て、冷蔵庫のフリーザーに保管する。

・五月四日

PTA役員、教師方で明日の草餅つきの打合せをする。
昔のままの手づくりですので、昨年の記録を確認
しながら、手順、やり方などを理解する。

餅米をといでおく。ヨモギのおにぎりをフリーザーか
ら出してとかしておく。臼、杵、あやとりのバケツ、せ
いろ、薪木、かまどなどを年長、年少の保育室前の園庭
にセットしておく。テラスに机を並べて大きいビニール
を張り、草餅の丸め台にする。明日の天気祈りつつ帰
る。

・五月五日―子どもの日、父親参観日、端午の節句、草

餅つき大会の日

早番の先生とPTA役員で釜の湯を沸かす。薪木がか
まどの口に赤々と燃えて、大きなせいろから、白い湯気
があがっている。

次々登園する子が、めずらしそうにかまどの火を見て
木片を探してきてくべたりする。「せいろ」の湯気を見
て「これ何しているの」と不思議そうに見ている。

杵をもって餅をつくのはお父さんの役。一臼三升あて
で四臼つくだので、お父さんに交替でついてもらう。初体
験のお父さん、お母さんが大多数。

お父さんの杵がベッタタンコと餅をつくと、園児が一斉
に「よいしょ」と元気なかけ声をかけ、その間にお母さ
んのあやとりの水がピタピタになって、餅つきのリズム
も呼吸もびったりで最高に盛上ってくる。

半分程つけた白い餅の中へ「みどりのヨモギ」を入れ
てまた掛声高くつきはじめ。みるみる白い餅が草色の
餅にかわっていくと、「わあ、色を入れなくても草色の餅
になるんだね」と子ども達はびっくりしている。お母さ

ん達も「草餅は色を入れていると思っていたのに、自然で色が出るんですね」と感心している。これこそ本当の健康食。

出来あがった草餅を、片栗粉をいっぱいまいてある台の上に移して丸める。湯気のがあったやわらかい草餅を応援のお母さん方が次々丸めて黄な粉にまぶし、お皿に二個盛ってはお砂糖をかけ、集ってくる子ども達に渡している。

園庭の思いおもいの場所に、お父さんと子どもでくつろいで楽しそうに食べている。

以上、わが園の一端を紹介したが、町の中の幼稚園では園庭も狭く、草が足りないから、園外散歩でヨモギ摘みをしたり、「ヨモギ」は家庭の小さな庭の隅や近所の空地、道路の道端などどこにでもある野草なので、一にぎり位づつ持ち寄るのもよい。当日になると結構集って、みどりの濃い草餅が誕生するものだ。

「ヨモギ」が集まりすぎたら、冷凍のまま保存して、お正月頃の草餅は珍しくいただける。

餅つき行事は、一般に秋の米の収穫の時や、お正月の頃学校や幼稚園で行事として行われるようだが、私達は十年程前から、新入園児や新しいPTAの会員のふれあいのため、五月に行っている。春先の野外で心いっぱい開放感を味わい、約一ヶ月近く、自然の中で遊びながら、花壇から野原へと多くのことに気づき学び、人と花と草と仲よしになるというプロセスを経て……。

「白いごはんがヨモギで草色の餅になる」までの経験と観察は「草餅つき」ならではの強い感動と満足感を与えてくれる。春の野の草つまからはじめて、遊びながら親子で手づくりの草餅を食べる喜びは、最高のように思う。

親同志、子ども同志の生き生きとした話合い、笑い声、花と共に歌い、鯉のぼりと共におどり……。

秋の実りの時には、ヨモギの実りととのび切った背丈を観察するのも楽しい。

(宮城県聖光幼稚園)